



訪問看護をしていると、ご利用者様やご家族様の持っておられる色々な思いに触れる機会が多いです。「入院中はお風呂に入れなかったから、自宅のお風呂にゆっくり入りたい」、「自分のペースで過ごせる今の生活をなるべく長く続けたい」、「人生の最期まで、家で過ごしたい」など、それぞれの方々の大切な思いです。

去年の4月に入社したばかりで、至らない点も多い私にとって、「自分に一体何ができるのか？」と自問自答する毎日です。ただ一つ一つのケアの際にも、「なるべくそういった大切な思いに、真摯に向き合わせていこう。」と考え、取り組むようにしています。

先日、訪問先の担当ケアマネジャーさんから、「訪問看護の際、介護者の方が、自分の思いを看護師さんに話したことで、もっと介護を頑張ろうと思えるようになったと仰っていましたよ。」という嬉しい情報をいただきました。

今後ご利用者様やご家族様の、時には揺れ動くこともある「思い」の理解に努め、「これからどうしたらよいのか？」と一緒に考えさせていただき、少しでも相手の方の思いに向き合うサポートができたと思います。



文責：濱地

お知らせ

いなべFMで『訪問リハビリ』についてお話させていただきます！

こんにちは、ナーシングホームももりハビリチームです。私たちは、利用者様のご自宅へ出向いてリハビリをしています。現在は、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の計7名で活動しております。

私たちのサービスには、介護保険・医療保険でご利用いただくサービスと、各市町の介護予防事業に関わるサービスがあります。どちらのサービスも、加齢や病気等、様々な事情で暮らしにくさを感じた方々が自分らしく暮らせるように、望まれる暮らしに必要な動きをイメージし、専門家の立場からご提案しています。

こんな私たちの活動をラジオでお話いたします。ぜひお聞きください。

いなべFM(86.1MHz)「みんなで支える幸齢社会」

放送時間：3月28日(金)13:15～、(再)29日(土)9:45～、18:45～



【発行】 有限会社だいち
ナーシングホームもも
【編集】 もも便り発行委員会
【発行月】 2025年2月(年3回)

★職員募集中★
私たちと一緒に働きませんか？
詳細はホームページを
ご覧ください

ナーシングホームもも

検索

<https://www.momo3.net>



【本社】

〒511-0241 員弁郡
東員町鳥取917-2
TEL 0594-75-0302

【鳥取】

〒511-0241 員弁郡
東員町鳥取917-2
TEL 0594-86-1110
TEL 0594-86-1113

【いなべ】

〒511-0428 いなべ市
北勢町阿下喜3514
TEL 0594-72-3530

【四日市】

〒512-8054 四日市市
朝明町441-1
TEL 059-336-3330

【桑名】

〒511-0901 桑名市
筒尾1-13-1
TEL 0594-33-0302

第23号 もも便り

ナーシングホームもも
令和7年2月発行



西暦2025年／和暦 令和7年と、新しい年になりました。

吹く風にも春の気配が感じられるようになり、春の足音がすぐそばまで聞こえてくる季節になりました。

今回のテーマは『おもい』です。テーマの“おもい”には、『思い』『想い』『念い』『重い』など、色々な漢字が当てはまります。ナーシングホームももの各事業所が、今回どのような『おもい』を持ってももだよりを書いたのか、想像しながら読んでいただけましたら幸いです。

桑名

“母の思いを叶えたいあーちゃん”
2人の思いを叶えたい訪問看護師たち

「京都が大好き。京都はいい思い出がたくさんあるの。」—ももの訪問看護を開始した際、Aさんが仰いました。Aさんは50代の女性。癌の末期で大腸に出血と痛みがあったため、自宅で過ごすのは難しいと言われていました。それでも、Aさんは家族、特に娘さんのあーちゃんと一緒に過ごしたいという思いがあり、また、あーちゃんもお母さんの望みを叶えてあげたいという強い思いがあり、退院しました。

状態が悪いときは夜中に何度も起きて痛がることもあり、その都度あーちゃんが起きて薬を飲ませてくれました。二人ともが一晩中眠れない日もありました。病気になる前は、ふたりで大好きなドリカムのコンサートや旅行に頻繁に行っていたため、「退院したら、あーちゃんと泊まりで旅行したい」と言われていましたが、なかなか病状が思うようには安定しませんでした。

そんな中、日帰りの京都旅行なら行けるかもしれないと、病院のワーカーさんも含め、サポートスタッフ全員で連携し、途中で急に容態が変化することも想定しながら、お二人で京都に行ける方法を模索しました。

京都旅行に向けて準備している間も、麻薬を使用することになったり、発熱が続いたり、体調が安定しない日々に、ご本人は「無理かなあ。」と落ち込んだり、「絶対行きたいの！」と泣いて訴えられることもありました。そんなAさんの姿を見て、あーちゃんはいつも前向きに「大丈夫だよ。行けるよ。」と背中をさすりながら励ましていました。そんなお二人の姿を見て、私たち看護師も何とかして京都に行かせてあげたいという思いが強くなり、京都に行く当日まで、「行けるといいね」ではなく、「京都に行くよ！」とみんなで声をかけ続けました。

旅行当日はご本人の体調が良く、大好きなあーちゃんと京都に出かけられました。帰って来るまでみんな心配していましたが、無事に帰ってこれ、笑顔で楽しかったお話を沢山聞かせていただきました。その後、暫くしてAさんは旅立たれましたが、後日、あーちゃんからの手紙には「お母さんのことをどうしても自分が看たかったから、家で最期を迎えられて良かった。お母さんが今年叶えたいことリストに、京都旅行と書いてあったから、叶えることができて良かった」と綴ってありました。ご本人の思いを1つでも叶えることができたことに、みんなで感動したエピソードの1つです。



ずっと行きたかった
京都大原三千院



～四日市 ご利用者A様が貰った“思い”と、変化できる看多機ケアを振り返って～

A様はお話好きで、小柄なのに体力のいる仕事を長年続けてきた働き者でした。“自分でできることは自分で”と強い気持ちの持ち主でした。ご主人様を亡くされてからは息子様と2人暮らしてました。

2015年、A様は背骨の圧迫骨折で入院し、退院が決まった時、昼間の介護者不在で施設入所を一旦は決められていました。しかし、「家に帰る。家で過ごしたい。」との強い思いで自宅に退院されました。担当ケアマネジャーより訪問看護の依頼があり、ももとのお付き合いが始まりました。自宅で安全に過ごす為の環境整備・転倒予防のリハビリ等に努め、無事に一人で生活できるまでに回復されました。そして、2022年の夏、脳梗塞の発症と大腿骨頸部骨折で再び入院となりました。しかし、その時も「家に帰る」の強い思いで入院中のリハビリを頑張られ、年度末に自宅に帰ることができました。

関係者は、今後を見据えて訪問看護から看護小規模多機能型居宅介護(訪問看護・訪問介護・通い・泊りあり)に切り替えることを提案し、ご本人の生活状態に臨機応変にサービス提供できるように整えました。当初は、「ももには行かない。」と言われていましたが、自宅で転倒し、ももでの泊りを利用することになりました。この頃から「動けない時はももがいい。息子に下の世話をしてほしい。」と思いを語られています。一方、息子様は「家で介護します。下の世話もします。」と言われ、私達は、お二人の思いにズレがあることを認識することになりました。

年明けの2023年には、ももで入浴(通い)と自宅の安否確認・生活リハビリ(訪問サービス)を開始し、在宅生活を再開されました。会話の中で「いよいよになったらももに行く。病院へは行かない。」とリハビリに励まれ、転倒の回数も減り、以前通っていた『整体院』に行くまでに回復されました。

2024年5月頃から体調がすぐれず、この頃から「体調が良ければ家で。悪ければももで。」と自宅とももを往復するようになります。それでも息子様のケアへの思いは変わりません。“自宅で介護をし、体調が崩れたらももに行く”を短期間のうちに繰り返すようになり、息子様の気持ちにも余裕がなくなり、スタッフに厳しい言葉を投げかけられるほどに状態が悪化します。

「いよいよになったらももに行く。」のその時がやってきました。もも滞在中(宿り)には、息子様は日に2回面会に来られ、“家に連れて帰りたい。”の思いがあったのでしょうか、お別れの時を察せられていたのでしょうか、よく涙されていました。酸素療法・痰の吸引が必要になり、息子様に説明すると「自分では無理です。ももでお願いします。」とA様の枕元で初めて言葉にされました。そして、その夜、A様は永眠されました。A様の思いが実現するよう看多機サービスをフルに活用し、自宅とももを往復しながら最期まで看取ることができた息子様も、清々しい表情でももを後にされました。

9年間のお付き合いの中で、お二人の思いをどちらも成立させることは困難でしたが、思いを受け入れ、寄り添いながらサービスを提供することで、私たちの思いはお二人に伝わったと感じています。この貴重な経験を今後の四日市でのサービスに生かしていきたいと思います。

文責：伊藤(和)・元島・山下



2025年が始まり1ヶ月が経ちました。もも鳥取では、恒例の初釜に始まり、餅つき等で新年の始まりを祝いました。玄関に飾った“もも神社”には干支の“蛇”が愛嬌ある顔で巻き付いています。絵馬には、「笑顔で過ごせますように」「元気な毎日が過ごせますように」等、皆さんの願いが溢れていて、阪神・淡路大震災から30年を迎えたことを思うと、当たり前のように無事新年を迎えられたことに改めて感謝しています。

そこで今回は、今年の干支である“蛇”、そして“災害”について触れてみたいと思います。

～皆さんは“蛇”どう思いますか？～

干支として描かれている蛇はとても可愛いく感じられるものの、本物はちょっと苦手と
思っている人も多いのではないのでしょうか。そんな“蛇”ですが、救急車に「スターオブライフ」
(生命の星)と呼ばれている星形の蛇のロゴマークがついているのをご存じですか？中央には杖と
蛇が描かれています。蛇のついた杖は昔から、医学と医療従事者の象徴とされてきました。その起源
は、古代ギリシャで癒しの神として崇敬された医師のアスクレピオスが非常に多くの命を救い、蛇の
巻き付いた杖を持っていたことから、アスクレピオスの杖といわれているそうです。最近、もも鳥取でも
救急車のお世話になる機会が何度かありましたが、全員元気になって帰ってこられ一安心です。
皆さんも今度、街で救急車を見つけたら「スターオブライフ」に注目してみてください。
今より“蛇”が好きになるかもしれませんね！



～災害への思い～

私事で恐縮ですが、阪神・淡路大震災の時は手術をして入院中でした。
“治ったら支援に行かなければ”と、被災地の様子を毎日テレビで一生懸命
見ていたことを思い出します。その後、被災地で健康支援にかかわる機会が
ありました。被災された方の印象深かった言葉の一つに、「茶碗でごはんが
食べたい」と仰られたのを覚えています。当たり前の生活が当たり前では
なくなった時の切実な願いでした。

日本では阪神・淡路大震災をきっかけに、災害支援やボランティア活動が活発になったように思います。
災害が繰り返されるたびに支援体制も制度化され、整っていきます。いかに経験が大事かということ
を思い知られるところですが、如何せん災害はいつ発生するかわからないため、日頃の訓練と備蓄が
大事とも言われています。

もも鳥取でも災害に備え、訓練や備蓄を行なっています。訓練では災害を身近に感じられ、我が事として
考えられるようになります。備蓄品は、どこへ保管するのが良いのか、物品もこれで良いのかを検討するた
め、これも一種の訓練になると思います。

南海トラフの巨大地震が今後30年以内に起きる確率について、これまでの「70%から80%」を「80%
程度」に引き上げと公表されました。きっと何年後かには震災を経験する人になるんだろうなという思い
が強まりました。備えあれば憂いなし、我が家の備蓄品も再確認したいと思います！



文責：星野